

長良川の水は入りません

3月議会の一般質問や予算案への質疑の中で、私は上水道の計画見直しについてただしました。長良川からの導水計画を柱の一つにした鈴鹿市の第5期計画は、平成22年までの計画です。ところが各自治体の給水量の伸び悩み、「水余り」によって、県企業庁は長良川導水を「平成23年以降」に先送りしてしまいました。大きな柱が鈴鹿市の計画の外になったのですから、数字的にもまったくつじつまが合わなくなっているのです。

実際は、木曽川からの水が来ている

水道局長は今回、「長良川の水は入りません」と、はじめて本会議で発言しました。私が「すでに一部通水しているといっても、あの水は名前を長良川といいながら、実際は木曽川用水を利用しているではないか」と聞いたことに答えたものです。いま長良川には三重県向けの取水口はありません。また、先送り計画のなかでも、取水口工事の見通しはありません。

鈴鹿市はすでに25年前から「北勢水道」から木曽川の水を入れています。場所は高岡の貯水タンクからで、日量最大1万トンを受けているのですが、水質などに問題はありません。木曽川上流から取水して桑名の播磨浄水場を経由して各地に給水している水は、長良川河口堰とは違いきれいな水なのです。もし、こんど先送り計画が動き出しても、これと同じ水が違うルートを通って来るということになります。

問題は、高い金を払っても必要な水かどうか

水道局長が認めたように「長良川の水ではなく木曽川の水」なら、鈴鹿に引いても良いとはいえません。今すすめている工事の莫大な事業費が、水道料金として上乘せになるからです。しかも量的には、新しい給水はまったく必要ない状態で、ムダな費用になってしまうのです。

嘱託職員の賃金が、少し改善されます

3月議会一般質問で、正職員と同じ仕事をしているのに低賃金の嘱託職員のことを取り上げました。嘱託・臨時身分の職員は、正職員を増やさないと年々比率が上がってきて、保育所などでは比率が逆転している異常事態です。しかも「補助的な仕事」ではなく、図書館の司書、保育士、学芸員など、その部署の中心を担う専門的な仕事をさせているのに、高卒初任給程度の賃金で昇給もありません。

今回の回答では、全体の賃金14万8500円から、保育士は15万4300円、保健師は16万6500円にと、少し改善となりました。しかし他の職種でも底上げをすることと、経験年数で昇給もできる制度にすることが必要です。さらに改善を求めていきます。

とんでもない！三同教の「部落の子」調査

まちがった「同和・人権教育」をすすめる三重県同和教育研究協議会（三同教）が、各小中学校に「部落の子どもの数」を報告するよう調査依頼をしていたことが明らかになり、松坂市議会で党議員団が追及しました。鈴鹿はどう対応したのか教育委員会に聞くと、内容が問題なので回答しないことにした、とのことでした。

解放同盟べったりの三同教らは、ちょっとした言葉尻を「差別事件」だとさわいで「糾弾会」を開くなど、無法な行為を行なってきましたが、みずから「差別意識」丸出しの調査をしていたのです。共産党の追及にあわてて文書を「撤回」しましたが、こんな団体に金も人も丸かかえできた県教委、その下の市教委は、真剣に反省し、この際きっぱりと縁を切るべきです。

鈴鹿でイラク戦争1周年のピースウォーク

3月20日、米英がイラクに攻撃をかけて1周年のこの日、全国・全世界で抗議行動を行ないました。鈴鹿でも40人が参加して、文化会館からハンターまで中央道路を歩いて、行きかう車や人に「イラクからの撤退」「自衛隊の引き上げ」を訴えました。

開戦の理由だった「大量破壊兵器」は見つからず、理由を「テロとの戦い」にしたらますますテロが広まっている、異常事態です。平和への道はただ一つ、まずアメリカが軍事的に手を引くことです。そして日本もです。

宅老所「駒どりの家」を訪ねました。

3月25日、神戸市長田区にある宅老所を森川議員とともに見学しました。「宅老所」とは、介護保険のデイサービスセンターの意味ですが、この「駒どりの家」は介護保険制度の始まるずっと前、阪神大震災より前から活動している、「地域のお年寄りの居場所」です。「もうひとつの家、もうひとつの家族」がキャッチフレーズになっています。

築100年の古民家に、あふれるお年寄り、ボランティアの笑顔

どこにあるのか案内看板をたよりに探しながら行くと、小さな路地の奥にふつうの家がありました。ところが入り口をのぞいて見るとびっくり！畳敷きの広間にお年寄りがぎっしりと座って、ご飯を食べていました。木曜日は地域のひとり暮らし老人の昼食会なのです。毎回100人もの方が来るとのことです。一度に座れないので交代で、来る人、食べる人、帰る人でごったがえしています。1食300円で、たっぷりのおいしい料理、ご飯や汁はお代わりOKです。私たちもお金を払って食べましたが、おいしかったです。

朝から準備して忙しく働いているのは、20人のボランティアの方々に、最高齢の87歳のおばあさんの元気なものには驚きました。駒どりの家は、50人もボランティアが支えていて、デイサービスも職員数人とボランティアで回しています。

明るくて広くてバリアフリーのデイサービスセンターがどこにでもあるご時世に、古くて狭くて車も入れない「宅老所」が、なぜ注目されるのか。それは、地域に根ざしたボランティア活動の成果、「福祉は人なり」を地で行く実践なのだと実感しました。まさに「百聞は一見に如かず」です。

一方ではピカピカの特養ホームが町の中に4月オープン

いろいろ話を聞いていると、「社会福祉法人駒どり」は、特養を建てて4月にオープンとのことで、そちらも見学に行きました。こちらも見えてビックリ！地下鉄駅の真上に建つビルの3、4階が施設になっていて、しかも全館すべて個室、これまで見た施設の中でいちばん立派なものです。何より町のど真ん中にあるのがいい。

それにしても、古民家の宅老所と、ピカピカの特養ホームのこの落差というか、そのどちらも住民が「自分たちが作ったんだ」と自慢していることに感動しました。高齢者がみんな楽しく、安心していきいき暮らせる町というのは、やはり「住民が主人公」なのだと感じた一日でした。

ずいそう

もし合併が進んでいたら？

いま三重県下でも、全国的にも、市町村合併をめぐるゴタゴタが毎日のようにニュースになっている。そんな中で鈴鹿市は、2002年12月議会で四日市市などとの「大合併」を否決し、昨年の選挙の後に川岸市長が、「鈴鹿市は合併せず単独で行く」と最終結論を出し、今日に至っている。

先日も市民の方から、「あのとき石田さんらが反対で頑張ってくれたから鈴鹿市は落ち着いているけど、もし通っていたら、今ごろはエライことやったなあ」と言われたが、本当にそうだと改めて思う。

鈴鹿の名がなくなり、新庁舎も建たず

今回は四日市という大きな町との合併だったから、行政や町づくりの大きなところは、どうしても四日市中心になってしまっただろう。いま建設の始まった新市庁舎も、四日市市役所に吸収される形で、計画は白紙だ。ムリに進めれば、「15階建ての支所」というバカなものになっていただろう。実際に、芸濃町などは津市との合併前に立派な庁舎を建てているし、ムダになる施設が全国あちこちに出現している。

何よりも、60年の歴史のある鈴鹿という名前が無くなっていただろう。それは単に名前だけでなく、これまで積み上げられてきた市民と行政の財産がともに消えていくことなのだ。

川岸市長は新しい基本計画を作ると表明したが、もし合併なら、本業は横において四日市などとの「すり合わせ」に全職員が奔走する毎日になっていただろう。莫大な時間と手間が不要になったから、そのエネルギーを新しい町づくりに回すことができるのである。

あらためて議会の議決の重みを考える

2002年12月議会での「合併議案」の賛否は、「賛成12、反対18」であった。もし3人が反対から賛成に回っていたら、結果は逆転していたのである。その内の私と森川さんのわずか2議席の値打ちと役割も、この時は大きいものだったと思う。そして、このような鈴鹿市の命運を左右した大事なときに、市民の代表である議員を務めていたこと、あの夏から冬にかけての緊張した毎日は、私にとっても本当に貴重な経験だったと思う。